いにしえ湖南ものがたり

松原田中遺跡（まつばらたなか　いせき）

国土地理院1/25000地形図「鳥取南部」より

現地調査スタート！

　これまでわかりにくかった調査地も、周囲に矢板が打ち込まれ、はっきりしました。

　矢板とは水田などのやわらかい地面を掘り下げるときに、周りの土砂が崩れたり、地下水が入らないように周囲に打ち込む板状の杭のことです。

　調査地の範囲は２つの区画を合わせても660㎡程しかありませんが、すでにたくさんの土器が出てくることが試掘調査で分かっています。

　矢板に囲まれた調査区の下には、どんな遺構や遺物が眠っているのでしょうか。

矢板に囲まれた調査区のようす。
奥に見える機械が次々と矢板を打ち込んでいました。

田んぼの畦が見えてきたで！

　調査区を掘り下げていると一面、砂が広がっていました。砂の表面をよく見ると、左の写真のように、灰色の土が筋状に延びていることがわかりました。

　この土は、縦、横に延びていて、交差している場所もあって、おそらく田んぼの畦（あぜ）になると考えています。周りの状況から洪水等によって運ばれた土砂で、一気に田んぼが覆われたのでしょう。

　出土した土器から、田んぼは戦国時代（約500年前）以降のものと考えられます。砂を丁寧に掘り下げると、きれいに区画された当時の田んぼの姿が見えてくるはずです。

　みつかった畦の一部を掘り下げると、畦の下にもさらに畦があることが分かりました。しかも下の畦の上にも砂がかぶっていて、田んぼが何度も洪水の被害にあっていることがわかります。

畦の断面

模式図

　ここに田んぼをつくった人は、洪水にひるむことなく畦をつくり直し、田んぼを耕していたんですね。

　災害に負けない人々の営みが感じられます。

第 16 号　2010 年 8 月 20 日

　畑や田んぼだけでなく、発掘現場でも毎日大活躍しているのが、鍬（くわ）や、昔は鋤（すき）と呼ばれていたスコップ。これらは農具の代表選手といえます。

　けれどもこの鍬や鋤、いつから、どんな形で使われていたか知っていますか？

農具の進化

　日本人が鍬をはじめとした農具を使い始めたのは、田んぼで本格的に米を作り始めた弥生時代。実はこの時代から現代まで、鍬や鋤の形はほとんど変わっていないんです。

　ただ「刃先」だけは、時代によって変わってきています。現代の鍬は、柄の部分以外**すべて鉄**でできていますが、弥生時代の初めごろに登場した鍬は、柄から刃先まで**全部が木**でできていました。

現代の鍬

　その後もすぐに全体が鉄になったわけではありません。

　弥生時代の終わりごろになると、別に**鉄でつくった刃先を鍬の先端につける**ようになりました。

　鉄を使っているのは刃先だけでも、作業の効率はずいぶん上がったことでしょう。

　この刃先だけが鉄の鍬や鋤は、弥生時代の終わりから、つい数十年前まで、二千年近くも使われ続けました。

（財）鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所
〒680-1133
鳥取市源太 12 番地
（旧鳥取湖陵高校美和分校内）

TEL ：0857-51-7553
FAX：0857-51-7550
メールアドレス：
matsuik@pref.tottori.jp

発掘通信

　熱中症注意の放送を聞くのも慣れてしまうほど暑い日が続いていますが、発掘作業は着々と進んでいます。

　現場でみつかったものはホームページでいち早くお知らせ中です。ぜひご覧ください。

鳥取県教育文化財団　調査室　検索

埋もれた太古のくらし

本高弓ノ木遺跡（もとだかゆみのき　いせき）

古代の大水路ついに完掘

先月号でお知らせした、古墳時代前期（約1600年前）の水路の調査が終了しました。幅５m、深さ１mのかなり大規模なもので、200mに及ぶ調査地を南北に縦走しながら、釣山に沿って、さらに北へとのびています。水田の導水路としてだけでなく、船が行き来できる運河だったのかもしれません。

南から見た水路
（さらに北（写真奥）へと続きます）

水路の底から１枚の鉄板が見つかりました。長さ５㎝、幅13㎝ほどの大きさで、両端が折り曲げられています。これは、木製の鍬や鋤の先に取り付ける鉄の刃先です（１ページ参照）。ひょっとすると、この大水路をつくる時に使われたものかも??

約1600年前、本高の地で高度な技術を用いた大規模な土木工事が行われていました。先進的な知識と技術を持ったリーダーのもと、近隣の村の人々が鍬や鋤を手に水路を掘り、木を切って堰（せき）を築き、周辺の開発を進めていったのでしょう。そしてそのリーダーの死後、その功績を称えて、本高の地を見下ろす丘の上につくられたのが、山陰最古の前方後円墳とされる本高14号墳！！
…なんてことを想像するとワクワクしませんか？

野坂川（のさかがわ）を見下ろす古墳

宮谷26号墳（みやだに　ごうふん）

いよいよ調査開始！

鳥取市嶋にある宮谷古墳群で、７月末から発掘調査を開始しました。野坂川に面した丘陵斜面につくられた宮谷26号墳という円墳を発掘しています。
直径10mほどの小規模な古墳ですが、墳頂からは野坂川流域の平野が一望できます。この一帯に勢力を持っていた有力者の墓に相応しい場所に古墳がつくられています。
約１ヶ月の発掘調査ですが、古墳がつくられた時期や埋葬施設の種類、副葬品など、いろいろなことを明らかにしたいと考えています。
今後をご期待ください。

上空から見た宮谷26号墳（白線の範囲が古墳）

池のほとりに住んだ人々

高住平田遺跡（たかずみひらた　いせき）

川辺でみつかった足跡

前回紹介した中世の川の調査を進めています。この川は調査区のなかで大きく蛇行していて、洪水などによる砂によって埋まっています。一部を掘り下げてみると、深さは約２mありました。

さて、川の周辺を調べていると、灰色の土の中に黒い土が点在しているようすが見られました。よく見ると、ウシの足跡で、中に入り込んでいるのは、その上にあった田んぼの土です。おそらく田んぼの中をウシが歩いたとき、その重さで下の土まで踏み込まれてついたと考えられます。

中世の川を掘り下げているようす

みつかったウシの足跡

歯を櫛のようにつけてウシやウマにひかせていました。

馬鍬の歯
長さは約20cmあります。

田んぼから、先がとがった鉄の棒がみつかりました。大きな釘のようにも見えますが、田んぼに水を入れてから耕す「代かき」のときに使われた馬鍬（まぐわ）の歯ではないかと考えています。
そうだとすると、この足跡はウシが馬鍬を引いたときのものかもしれません。
馬鍬の歯は耕しているときに外れてしまって、田んぼの土の中に残ったものなのでしょうか。